

## 「わざわざだ、律法学者」

ルカの福音書 11:45~54

### はじめに

前回からのイエシュアの「わざわざだ」メッセージの第二弾、今回は前回のパリサイ人とともにいた「律法の専門家、律法学者」たちに対するイエシュアの非難また警告を記した箇所です。その前に少し前回の補足をします。

#### ルカの福音書【新改訳 2017】

11:44 わざわいだ。おまえたちは人目につかない墓のようで、人々は、その上を歩いても気がつかない。」

当時のユダヤ人の宗教指導者であったパリサイ人たちに対し、イエシュアは彼らを指して「**人目につかない墓**」とたとえられました。この「**墓**」は死体のある場所、宗教的汚れの象徴であるとし、当時のパリサイ人たちの外面だけを取り繕った、内面の汚れを指摘されたものと理解することができます。しかしそのような解釈だけでは、ここに隠された神のご計画は見えきません。しかもこの「**墓**」を意味するヘブル語のケヴェル(קֶבֶר)は実は本来、死や汚れを象徴するような言葉ではないのです。

#### 創世記【新改訳 2017】

15:13 主はアブラムに言われた。「あなたは、このことをよく知っておきなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない地で寄留者となり、四百年の間、奴隷となって苦しめられる。

15:14 しかし、彼らが奴隷として仕えるその国を、わたしはさばく。その後、彼らは多くの財産とともに、そこから出て来る。

15:15 あなた自身は、平安のうちに先祖のもとに行く。あなたは幸せな晩年を過ごして**葬られる**。

15:16 そして、四代目の者たちがここに帰って来る。それは、アモリ人の咎が、その時までで満ちることがないからである。」

これはアブラハムとその子孫たち、すなわちイスラエルの民に対する主のご計画です。これは出エジプト記にあるようなイスラエルを異国の地における奴隷の状態から、その苦しみから主ご自身が解放、救い出して彼らの父祖アブラハムが「**葬られ**」ている地に帰らせるというものであり、ここに「**墓**」ケヴェルの語源である「葬る」という意味の動詞カーヴァル(קָבַר)の初出があるのです。そしてその名詞形である「**墓**」ケヴェルの初出も同じくアブラハムが買い取り(創世記 23:4)、妻サラを葬り、そして自身も葬られた「マクペラの洞穴(創世記 23:9)」を指し示しています。ちなみにここに葬られたアブラハム、サラ、イサク、リベカ、ヤコブ、レアの頭文字を組み合わせるとイスラエル(יִשְׂרָאֵל)となります。ともかく、このように「**墓**」ケヴェルとは本来、汚れなどではなく、イスラエルの民が主によって救い出され、そして帰らされた彼らの先祖たちからの土地を所有するという神のご計画を指し示す言葉なのです。そしてこのご

計画は、終わりの日、獣と呼ばれる反キリストの脅威から、地上再臨されるメシア、イエシュアによって救い出され、主がアブラハムに約束された地（創世記 13:17）を彼らが所有するようになることで成就します。このような神のご計画は今日にいたるまでユダヤ人たちには隠されており、それはまさに「**人目につかない墓のようで、人々は、その上を歩いても気がつかない。**」とたとえられるものであり、ここにはそのような「神の国の奥義」があることをぜひ知っていただきたいのです。前回も述べたように、聖書を誰かを非難するため、あるいは自分を責めるための道具に用いるのではなく、ただ神のご計画のその完成である「神の国」に目を向ける、目を留めるためのものとして用いていただきたいのです。それでは今日の内容に入ってまいりましょう。

## 1. 侮辱する

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:45 すると、律法の専門家の一人がイエスに言った。「先生。そのようなことを言われるなら、私たちまで侮辱することになります。」

イエシュアの「**人目につかない墓**」のたとえを聞き、律法学者がここで口をはさみ、これは「**侮辱**」であると彼らは言いました。イエシュアのたとえを宗教的汚れ、つまり神に受け入れられない行為、罪として理解したならば当然の反応です。しかしここにも奥義があるのです。なぜならこの「**侮辱する**」という意味のヘーラフ(הָרַף)もまた本来は全く異なる意味の言葉だからです。

創世記【新改訳 2017】

8:21 主は、その芳ばしい香りをかがれた。そして、心の中で主はこう言われた。「わたしは、決して再び人のゆえに、大地にのろいをもたらすはしない。人の心が思い図ることは、幼いときから悪であるからだ。わたしは、再び、わたしがしたように、生き物すべてを打ち滅ぼすことは決してしない。

8:22 この地が続くかぎり、種蒔きと刈り入れ、寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜がやむことはない。」

これはかつて全地を襲った大洪水のその後、主がノアに告げられたものです。ここで「冬 (をすごす)」と訳されているのが本来のヘーラフなのです。そしてこのヘーラフが示す冬とは「刈り入れ」収穫期を示し、正確には「秋」を意味する言葉なのです。そしてこの主の御言葉は福音の「種蒔きと刈り入れ」すなわち多くの者が福音を聞き、そして救われることを指し示したものです。つまりヘーラフとは本来、福音を受け入れ、信じた者たちが主のみもとに収穫すなわち集められ、救われることを意味する言葉なのです。またこのヘーラフの名詞形ヘルパー(הַרְפָּה)の初出箇所も見てください。

創世記【新改訳 2017】

30:22 神はラケルに心を留められた。神は彼女の願いを聞き入れて、その胎を開かれた。

30:23 彼女は身ごもって男の子を産み、「神は私の汚名を取り去ってくださった」と言った。

30:24 彼女は、その子をヨセフと名づけ、「主が男の子をもう一人、私に加えてくださるように」と言った。

これはヤコブすなわちイスラエルの最愛の息子ヨセフ誕生の場面です。「神は私の汚名（ヘルパー）を取り去ってくださった」と訳されていますが、直訳としては「集めて、収穫してくださった」となります。そしてヨセフが生まれました。御子イエシュアは「ヨセフの子」とも呼ばれます。ですからハーラフ「侮辱する」ヘルパー「汚名」という言葉には主イエシュアによって集められ、救われる者たちの存在が指し示されているのです。つまり「人目につかない墓」にたとえられたイスラエルに対する神のご計画の奥義のその成就によってイスラエルの民は「集められ」、ヨセフの子と呼ばれたイエシュアによって救われるということが「私たちまで侮辱することになります」と言った律法学者の言葉には秘められているのです。このように、聖書は神のご計画を記した預言書です。一見無知な者が言い放った軽率な言葉のように記されたものであっても、それが聖書に記されている以上、それは悪しき言葉でも不要な言葉でもなく、そこには必ず神のご計画が指し示されているのです。このように読み解き、読み取るならば、聖書はすべてが神のご計画を指し示す預言書となりますが、逆にこのように読み解かないならば、私たちは聖書の大部分を不要なものとして無視し、捨てることとなります。それこそまさにわざわざ、聖書に対する侮辱となるのではないのでしょうか。

## 2. 荷物を負わせる

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:46 しかし、イエスは言われた。「おまえたちもわざわざだ。律法の専門家たち。人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本触れようとはしない。

イエシュアの厳しい非難の言葉が見て取れます。しかしこれもまた神のご計画の「型」たとえなのです。「荷物を負わせる」という意味のアーマス(אָמַס)の初出箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

44:13 彼らは自分の衣を引き裂いた。そして、それぞれろばに荷を負わせ、町に引き返した。

44:14 ユダと兄弟たちがヨセフの家にやって来たとき、ヨセフはまだ、そこにいた。彼らはヨセフの前で顔を地に伏せた。

この出来事はエジプトの宰相となったヨセフと、それを知らずにいた彼の兄弟たち、イスラエルの十二人の息子たちについてのものですが、ヨセフの兄弟たちは「衣を引き裂」き、アーマス「荷を負わせ」そして「ヨセフの家」に「引き返し」「ヨセフの前で顔を地に伏せた」とあり、ここに「荷を負わせ」と訳されているのが聖書で最初のアーマスです。このようにアーマスとは本来、自分の罪を認めて悔い改め、王の御前に立ち返り、ひれ伏すという出来事を指し示しているのです。これは終わりの日、イエシュアを否定し、十字架によって殺した自分たちの罪に気づき、メシアであるイエシュアに立ち返り、その御前にひれ伏すようになるイスラエルの民、イスラエルの残りの者を指し示したその「型」となる出来事です。この出来事、この神のご計画は人の「指」人の手、すなわち人の努力や能力によっては成し遂げられません。この「指」のことをエツバ(עֲצָבָא)といい、本来は「神の指（出 8:15）」を意味する言葉です。まさにこのような神のご計画、イスラエルの回復の御業はただ「神の指」の御業であり、それは御父から

遣わされた御子イエシュアの御業だけによるものであり、人によるもの、イスラエルの民の力によるものは一つもありません。それはまさに律法学者たちが「自分は、その荷物に指一本触れようとはしない」というたとえがこの事実を指し示しているのです。つまり人は指一本触れる必要がない、触れることができないものなのです。終わりの日、イスラエルの残りの者たちはただ神の霊によって、地上再臨されるイエシュアご自身によってのみ神に立ち返らされるのです。そのような神のご計画がここには秘められているのです。

### 3. 血の責任を問う

#### ルカの福音書【新改訳 2017】

11:47 わざわいだ。おまえたちは預言者たちの墓を建てているが、彼らを殺したのは、おまえたちの先祖だ。

11:48 こうして、おまえたちは先祖がしたこと証人となり、同意しているのだ。彼らが預言者たちを殺し、おまえたちが墓を建てているのだから。

11:49 だから、神の知恵もこう言ったのだ。『わたしは預言者たちや使徒たちを彼らに遣わすが、彼らは、そのうちのある者たちを殺し、ある者たちを迫害する。』

11:50 それは、世界の基が据えられたときから流されてきた、すべての預言者の血の責任を、この時代が問われるためである。

11:51 アベルの血から、祭壇と神の家の中で殺されたザカリヤの血に至るまで。』 そうだ。わたしはおまえたちに言う。この時代はその責任を問われる。

ここでイエシュアは「おまえたちの先祖」が殺した「預言者たちの墓」を「おまえたちが…建てている」という表現を二度繰り返しておられます。「墓」とは先ほど述べたようにイスラエルの民が帰るべき場所、主から与えられる約束の所有地を指し示すものであり、その象徴は「祭壇と神の家」すなわち神殿、エルサレム神殿です。これは「おまえたち」ユダヤ人たちによってかつて二度建てられました。一つはダビデの子ソロモンの時代に、もう一つはダビデの子孫ゼルバベルの時代に。このイエシュアの繰り返された表現にはその事実がたとえられているのです。しかしこれらの神殿および神殿礼拝は神の御心に逆らうもの、神の御言葉を語った預言者たちを否定し、これを迫害し、殺すものとなりました。以下はその象徴としてイエシュアご自身が挙げられた預言者「祭壇と神の家の中で殺されたザカリヤ」についての記述です。

#### Ⅱ 歴代誌【新改訳 2017】

24:19 彼らを主に立ち返らせるため、預言者たちが彼らの中に遣わされた。預言者たちは彼らを戒めたが、彼らは耳を貸さなかった。

24:20 神の霊が祭司エホヤダの子**ゼカリヤ**をおおった。彼は民よりも高いところに立って、彼らに言った。「神はこう仰せられる。『あなたがたは、なぜ主の命令を破り、繁栄を逃がすのか。』あなたがたが主を捨てたので、主もあなたがたを捨てられた。」

24:21 ところが、彼らは彼に対して陰謀を企て、王の命令によって、主の宮の庭で彼を石で打ち殺した。

24:22 ヨアシュ王は、ゼカリヤの父エホヤダが自分に尽くしてくれた誠意を心に留めず、かえってその子を殺した。**ゼカリヤ**は死ぬとき、「主がご覧になって、責任を問われますように」と言った。

イエシュアはこの「**ゼカリヤは死ぬとき、「主がご覧になって、責任を問われますように」と言った**」ことに応え、神である主ご自身としてここで「**わたしはおまえたちに言う。この時代はその責任を問われる**」と言っておられるのです。ではその責任はどのようにして問われるのでしょうか。モーセの律法には「**父が子のために殺されてはならない。子が父のために殺されてはならない。人が殺されるのは自分の罪過のゆえでなければならない（申命記 24:16）。**」とありますが、先祖たちの罪に「**同意している**」おまえたちも同罪だと言っておられます。そうなるイスラエルはもはや死に絶え、滅び去るしかありません。そしてイスラエルによって祝福される諸国の民という「神の国」のご計画も水泡に帰します。ですから「**すべての預言者の血の責任を**」もまたイエシュアが背負われたのです。それがあの十字架で流されたイエシュアの血であり、その死です。この「**血の責任**」がイエシュアの十字架によって果たされたことにより、神が人に命じられた第一の命令にして神の祝福の顕現である以下の御言葉が成就します

#### 創世記【新改訳 2017】

9:1 神はノアとその息子たちを祝福して、彼らに仰せられた。「**生めよ。増えよ。地に満ちよ。**」

9:5 わたしは、あなたがたのいのちのためには、あなたがたの**血の価を要求する**。いかなる獣にも、それを**要求する**。また人にも、兄弟である者にも、人のいのちを**要求する**。

9:6 人の血を流す者は、人によって血を流される。神は人を神のかたちとして造ったからである。

9:7 **あなたがたは生めよ。増えよ。地に群がり、地に増えよ。**」

このように「**血の価**」の要求が満たされることによって神がかつてエデンにおいて人とその妻、アダムとエバに命じられた祝福が、一度は人の罪によって失われた現実が回復、いや再創造されるようになったのです。イエシュアの十字架の血が、その「**血の価**」がいかに大きいものであるかを私たちは決して忘れてはならないのです。これもまた人には決して成しえない、まさに「指一本」触れることのできない、神のみによる働き、責任と言えるものです。

#### 4. 知識の鍵

##### ルカの福音書【新改訳 2017】

11:52 わざわいだ、律法の専門家たち。おまえたちは知識の鍵を取り上げて、自分に入らず、入ろうとする人々を妨げたのだ。」

このイエシュアがたとえられた「**知識の鍵**」とは何でしょう。この「**知識**」を意味するダアット(תַּדְוֹת)およびその語源となる「知る」という意味のヤーダ(יָדָה)はいずれも本来、食べると必ず死ぬと言われた「**善悪の知識の木**」を指し示す言葉です。また「**鍵**」という意味のマフテーアッハ(מַפְתֵּיחַ)の初出は、死体のある部屋の「**鍵**」(士師記 3:25)を意味し、その語源である「開く」という意味の動詞のパータハ(פָּתַח)は本来、地上に滅びをもたらす天の水門が「開く」(創世記 7:11)ことを意味します。ですからこの「**知識の鍵**」とは実は「**死と滅び**」を指し示しており、これを「**取り上げて、自分に入らず、入ろうと**

する人々を助け」ることは「死と滅び」の部屋に入らず、それを免れることであり、救われる者にとっては絶対に必要なことを指し示しているのです。

ではこのような神のご計画を秘めた御言葉を、イエシュアはなぜ再三にわたって「わざわいだ」「わざわいだ」と言っておられるのでしょうか。ここに使われている「悲嘆の声」を意味するオーイ(אֵי)の初出箇所を見てください。

民数記【新改訳 2017】

21:25 イスラエルはこれらの町々をすべて取った。そしてイスラエルは、アモリ人のすべての町、ヘシュボンとそれに属するすべての村に住んだ。

21:27 それで、詩のことばを語る者たちも言っている。「来たれ、ヘシュボンに。シホンの町は建てられ、堅くされている。

21:28 ヘシュボンから火が出た。シホンの町から炎が。それはモアブのアルを、アルノンにそびえる高地を焼き尽くした。

21:29 モアブよ、おまえはわざわいだ。ケモシュの民よ、おまえは滅び失せる。その息子たちは逃亡者、娘たちは捕らわれの身。アモリ人の王シホンの手によって。

21:30 しかし、われわれは彼らを投げ倒し、ヘシュボンはディボンに至るまで滅び失せた。われわれはノファフまで荒らし、それはメデバにまで至った。」

これは「詩のことばを語る者たち」が歌ったイスラエルの勝利の歌です。ここに聖書で最初のオーイがあり、それはイスラエルに敵対した国々への「わざわい」すなわちイスラエルの勝利を指し示す言葉であることがわかります。このように、神のご計画とは、イスラエルに敵対する者たちをことごとく滅ぼし、国々の中でイスラエルに勝利をもたらすことにあるのです。それを指し示す言葉がこのオーイであり、この言葉に秘められた奥義は「わざわい」であって「わざわい」ではないのです。

## 5. 敵意

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:53 イエスがそこを出て行かれると、律法学者たち、パリサイ人たちはイエスに対して激しい敵意を抱き、多くのことについてしつこく質問攻めを始めた。

11:54 彼らは、イエスの口から出ることに、言いがかりをつけようと狙っていたのである。

ここでパリサイ人も律法学者も一緒になってイエシュアに「敵意を抱き」、質問攻めにしたことが記されています。この様子はここに使われているカーシャル(קָשָׁר)の初出箇所と結びついています。それは以下のものです。

創世記【新改訳 2017】

30:41 また、強い群れにさかりがついたときに、ヤコブはいつも、あの枝を水ぶねの中に、群れの目の前になるように置き、枝のところまで交尾させた。

30:43 このようにして、この人は大いに富み、多くの群れと、男女の奴隷、それにらくだとろばを持つようになった。

これはヤコブすなわちイスラエルが自分の家畜の繁殖に成功し、これを大いに増やしたという出来事です。彼は白く皮を剥いだ「**あの枝**」を群れの「**目の前になるように**」置きました。ここに聖書で最初のカーシャルがあり、その結果「**このようにして、この人は大いに富み…**」とあり、イスラエルの群れが大いに増えたことが記されています。イエシュアの御前に殺到し、激しく質問攻めをするユダヤ人たちの様子はまさに「**さかりがついた**」家畜のようで、水を求めて殺到する群れのようであったでしょう。これはまさにイスラエルの群れが大いに増えるという出来事を指し示し、やがて「神の国」においてイエシュアのみもとに集められ、祝福され、大いに増える民となるイスラエルの民の「型」であると言えます。ちなみに「律法学者」はソーフリーム(סופרים)学派とも呼ばれますが、その由来は「数える」という意味のサーファル(ספר)で、この言葉は本来、主がアブラハムに天の星を指して「数えられるなら数えなさい、あなたの子孫はこのようになる」と約束された創世記 15:5 の御言葉から来ています。今日のこの箇所ではイエシュアの前にはいたのが彼ら律法学者、ソーフリームであったことは決して偶然ではなく、神のご計画を指し示すうえで重要な意味をもった存在であり、すべては神の計らいであったのです。このように、訳語から想像されるイエシュアの辛辣な言葉とユダヤ人たちの激しい敵意とは裏腹に、原語であるヘブル語の、その本来の意味において見るならば、主がいかにイスラエルを愛し、これを選び、これを祝福しようとしておられるかということがそのような神のご計画がここに見えてくるのです。

今日の箇所は一見するとイエシュアとユダヤ人たちとの激しい対立、争う姿を想像してしまいます。しかしそこに秘められた奥義はイスラエルを救い出し、これに勝利をもたらし、そして祝福して大いに富ませるという神のご計画であり、それをたったお一人で成し遂げられる御子、主イエシュアの御姿、その御業です。この御方、この事実にごそ私たちは目を向け、目を留めなければならないのです。ですから私たちは「わざわざだ」などと言って誰かを非難し、責めている場合ではないのです。むしろこの時のパリサイ人と律法学者たちが「**イエスの口から出ることに、言いがかりをつけようと狙っていた**」ように、イエシュアの御言葉の一つひとつに狙いをつけて「これはどういう意味か」「それはどういうことか」と激しく尋ね求めていくべきなのです。それはもちろんいわゆる敵意ではなくイエシュアを主として慕い求めるといった意味においてですが。どうか私たちの目が、ますますこのイエシュアと、この御方によって成し遂げられる神のご計画の、その御言葉にのみ向けられ、「**狙って**」尋ね求めていくことができますように。